
すらい魔の世界を巡る旅

ヨヌフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すらい魔の世界を巡る旅

【Nコード】

N8322X

【作者名】

ヨヌフ

【あらすじ】

渋谷満はVRMMO（仮想現実内多人数同時参加型オンラインRPG）【セレネ・ワールド】の終わりを仲間達と楽しく語らいながら迎えようとしていた。いよいよ最後を迎えるその時、彼に悪（運営）の魔の手が迫り来る。

魔物と魔女と愉快な仲間達による国取り物語が始まる。……のか？

作者はもう一つの作品をメインに進めているので、この作品はもう一つより遅くなります。目指せ月2更新。

プロローグ（前書き）

オリジナルは初書きです。よろしく願います。
拙い文ではありますがこの作品を楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

「ただいま」

俺は一人暮らしなので返事が無いのがわかっているが口から出てしまう。家から出るときは「いつてきます」帰ってきたときは「ただいま」俺は一度体に染み込んだ事は簡単には変えられない人間のようなのだ。傍から見れば誰も居ないのに…寂しい人だ。と思われるだろうが。

家の中に入り、手荒いうがいをする。手洗いうがいは毎日健康に過ごすためには大事なことだ。後こっちの方が主な理由だが気分がすっきりする。そこからも何時も通り、晩飯を食べた後、歯磨きと飯の後片づけをしてから、風呂にゆつくり入る。ぬるめのお湯にゆつくりつかるのがいい。風呂上りに牛乳を一杯飲んだ後、また歯磨きをする。

このような家に帰ってからの行動を友人達に話すと、友人達にはお前ちよつとキモい。と言われた。……仕事でもVR内でも予定通りに行かないんだから、この短い時間だけでもいいじゃないか。規則正しい生活は自の健康を保つのに必要だし、何より自分が考えた予定通りに動けるのは気分が良い。

その後は遊び時間だ。少し高い買い物だったVR装置付きベットに横になり、何時ものように俺は【セレネ・ワールド】にダイブした。

【セレネ・ワールド】はプレイヤーはモンスターと戦い自らの所属する国を発展させていく中で、世界に隠された秘密を見つけていき。やがて現れる強大な敵と力を合わせて戦っていくという、比較的単純なストーリーを主軸にしたVRMMOゲームである。

しかし、その大筋のクエストとは別の様々なサブクエストや世界を作り上げたと言われる程の自由度の高さ、運営の悪ふざけと呼ばれる特殊イベント、このゲームにしかない特殊なシステムがこの世界の人気の理由である。

「よつこらしよつと」

一応、ギルドのリーダーである俺は、始まりは何時もギルドホールの俺の部屋にあるベットから始まる。ベットから起き上がった俺がするのは毎回動作の確認だ。俺のアバターはかなり特殊であり他の方々のアバターとは動かし方が根本的に異なっているのだ。

俺が部屋の中で動作の確認をしていると。どたどたと廊下を歩く音が聞こえたかと思うと、ドアがノックと同時に開け放たれた。

「リーダーおっはよう。って、乙女がいるのにその姿はありえないよ」

「確かに、この姿は長年付き合っている私でもどうかと思うが、返事を待たずに開けるお前もどうかと思うぞ」

不法侵入者と会話しながら俺は体中から伸ばしていた触手を仕舞いはじめた。

【セレネ・ワールド】のキャラクターは製作時に固有スキルというものが付いてくる。固有スキルの中にある技や魔法、は似た効果でも通常のスキルに含まれている技などより効果が高く、また固有スキルにしかない効果もある。この固有スキルはキャラ設定時に選んだ種族と職業に応じて無数のスキルからランダムに二つ選ばれる。しかし固有スキルの中には種族、職業に関係なく付くものがあり。その中で運営最初の悪ふざけと呼ばれている〇〇の呪いスキルというものがある。これはキャラの見た目が大幅に変わり、変わった見た目に応じてNPCに嫌われる、装備が限定されるなどの様々なマイン要素がつくが。素のステータス、特にHPが高くなる。というものである。〇〇の呪い系スキルは選ばれる確立が低く、折角作

ったキャラが変わるため、プレイヤーの中でも呪い憑きと呼ばれる
○○の呪い系スキル持ちの人は50人もいない。

しかし、俺はその呪い憑きであり、本来一つしか憑かない○○の
呪い系スキルの内、唯一二つ憑く組み合わせの【海魔の呪い】と【
すらいむの呪い】持ちなのだ！

呪い憑き自体は出る確率は三百万分の一だが、呪いは四十種類近
くあるから、おふざけで入れたそれを引き当てるとは、宝くじ当て
るよりすごいぞって運営から直々に言われた。うれしくないやい。

「リーダー、今日はなにをするの？」

「私の文句はスルーか、貴様、このケモ耳ロボメイドが。まあいい、
若手の育成もないし、今日は起源龍の庭園でお気に入りレアモン
スターをソロで狩りまくって素材集めの予定だ」

あの見た目は可愛い強力なドラゴンの素材をマックスまで溜めて
自室に飾るのが目標だ。

「……リーダー、最後の日なのにそれはないよー。若手の人達は出
かけてるけど、いつものメンバーは広間で待っているから早く行こ
ー」

「知るか、私は素材集めにお庭に行くのだ。まで、掴むな！ええい、
離せ、離すのだ。馬鹿力で引つ張るな！腕が千切れる！仮にもメイ
ドの見た目をしているならリーダーには従わんか！」

「大丈夫、大丈夫。ちぎれないちぎれない。それに同じ前衛だか
ら振り払おうと思えば振り払えるくせに、素直じゃないんだからこ
の天邪鬼さんめー。後、仮にもメイドとか言うな、千切るよ」

「同じ前衛といっても壁役と攪乱役では力が違うし、お前に勝てる
力は姐さんしかおらんだろ。それに私は天邪鬼ではない！後、千
切るって何処を！？」

「じゃあ、ツンデレさんー？」

「違うわっ！」

そう、今日は、世界が終わる日、【セレネ・ワールド】が沈む日である。

【セレネ・ワールド】の急なサービス停止が発表されたのは今から、4ヶ月程前の話である。

急なサービス停止の理由については、世界観を一新したゲームを開発したくなった。人気が落ちてきた。新規加入のユーザーが増えなくなった。古参と若手の争いが酷くなったなどの他に、デスゲームが発生した。プレイ中に事故が起き人が死んでしまった。運営が死んだ。運営が苦情の対応にめんどくさくなった。風が吹いて桶屋が儲かった。運営が結婚した。運営の気まぐれなど様々な噂が流れたが、いまだに詳しい理由は明らかにされていない。

運営の緊急時の対応を知っている人々は、運営が一番この世界を愛していることを知っているので、惜しみつつもサービス停止を仕方ない事情があるのだらうと受け入れている。俺はちょっとした事情で運営に会うことが容易い立場に在ったのだが、その四ヶ月前から何故か運営が姿を見せなくなった。

会う度に嫌な奴だと再認識させられるような人で会ったが、長い付き合いなのでいざ会えないと少し寂しくなる。それに何故この世界を終わらせようと思ったのか聞きたい。

後、いろいろな意味で心配だ。切実に。

それはさておき、暴力主義の人の話を聞かない馬鹿力誘拐犯ケモ耳口ボ駄メイドに連れられた俺は、ギルドホームに6つある広間の内中央の広間の前まで引つ張られ、そのまま無慈悲にポイツとゴミのように広間の中央へと投げ込まれた。

「リーダー持って来たよー」

「へぶっ」

「おはようさん、リーダー。今日も卑猥やね」

「おはよう、リッキー。遅かったね」

「お早う、だな。リーだーよ」

「……おはよう」

「……おはよう、皆の集。ところで素材取りに行ってもいいかね」

「「「「却下（です・だよ・で御座る）！」「」「」」」

「ですよねー」

此処、我がギルドホームの中心ブロックにある、俺のアイデアが詰まった広間【すらいむと海の生き物達の広間】に集まっているのは、我がギルド最強、……いや、【セレネ・ワールド】最強のチームと言っても過言ではない6人である。

まず不法侵入、此処まで俺を引っ張る、人を投げる、など様々な事件を起こした、狐耳ロリロボメイドであるハイセリアンのリン・コガラシ。こいつは【機械神の呪い】を持つ俺と同じ呪い憑きだ。今でこそ見た目は普通の狐タイプの獣人と変わらんが、昔はやたらレトロなロボットに狐耳を引っ付けた悲惨な姿だった。この中では一番初めに知り合った仲だ。プレイヤーネームはケモ耳メイド。

次に投げ込まれた後一番先に俺に話しかけてきた、俺を卑猥だと言ってくれやがった奴はハイエルフの桜・P・アルストロメリア。Pはポットマンの略であり、ポットマンとアルストロメリアも花の名前らしい。プレイヤーネームは白光少女。

二番目に俺をリッキーなどと呼んだのは、ハイヒューマンのメサイア・フォールレイン。中二病から抜け出したいと言っているが、もし本当なら、まずその名前を変えろと言いたい。後キヤラは女だが中身は男だ。こいつの固有スキル【堕ちた神の呪い】と言つの呪

い憑きの中では当りの部類の呪いになる。

このメンバーは皆、廃人と呼ばれている程で当然の如く固有スキルも進化している。進化する前のこいつの固有スキルは「墮天使の呪い」。要は設定したキャラに黒い翼とか欠けた天使の輪が付くだけなのだ見た目の変化は。見た目の欠点がない呪い付きとか羨ましい限りだ。NPCも教会の利用が難しくなるだけと言う恵まれぶり。プレイヤーネームは救世主。

三番目のリーダーと微妙に違う発音をしたのは、ハイドワーフの武蔵・ゴールドバグ。刀の美しさに憧れてドワーフ族を抜け出し侍になったドワーフ族の青年のロールプレイをしているが。時々、キャラが崩れたり、口調がおかしくなる。プレイヤーネームは小次郎。

最後に話しかけてくれた人は、この「セレネ・ワールド」最強である、我がギルドの最終兵器。ハイドラゴニートの雪。通称雪姐さん。普段はテンション低めだが戦闘になると急にテンションが上がる人だ。プレイヤーネームはあねこ。

最後に、このギルド「カース&カオス」のリーダーであるこの俺。キャラ名はリキッド・カースラブリフト。種族はハイダーク。固有スキルは「すーぱーすらいむの呪い」と「海神の呪い」だ。見た目は人型の時は白髪で灰色なだけの典型的なダークエルフ。呪われた時の姿は基本は無数の蛸の腕、烏賊の足。胴体は鯨一匹丸々、頭は海月つばい。それらをスライムが纏めている黒いからだである。呪われた姿は基本的にSAN値が下がる為、封印である。

そんな、奴らが集まったのだ。これは素材狩りに行くしかないだろう！

「つまり、一人はダメだが。皆で行くならかまわないと言うことかね」

ドゴン！リンの拳が俺の腹を吹き飛ばした。

ボウツ！桜の魔法が俺の体を燃やした。

カキンツ！メサの銃が俺の体を凍らした。

スパンツ！武蔵の刀が俺を切り刻んだ。

ドッゴオオン！姐さんの蹴りがバラバラになった俺の体をまとめて上空へ吹き飛ばした。

「……………今日が最後！……………」

ドシヤツ

「……………すいま…せんし…た……………ガクツ」

「効果音を口で言うんやないよ」

そこは突っ込むなよ。桜。

思わぬ大ダメージを喰らった俺だがなんとか再生した後は、真面目に皆と今までを振り返りつつ語り合う事にした。ここまでバラバラにされると結構痛いのだ。こうして俺は最後の日も暴力に屈した。

プロローグ（後書き）

ちよくちよく書いていた奴が貯まったので投稿。
頑張って書いていますが如何せん遅筆なので進みません。

1話

「そう言えば、あの時も別の意味で大変やったな」

「桜の言うあの時とは、メサがストーカーに追われていた時の話か？」

「やめろ！それは俺のトラウマだ！」

「やめろと言われても他人の不幸は蜜の味だからな。それにメサはなかなかいいオチはあるしな。」

「なかなかいいオチはついてたと思うよー。キャラの見た目が女だから追われていてー、リアルバレした後は男の娘だから余計に追われたってことはー」

「……メサは可愛い」

「だから思い出させるなー！」

「仲良き事は美しき哉」

「武蔵は黙ってる！」

やっぱり何やかんやでここまでやってきた仲だ。会話が弾みメサをいじり、俺が吹き飛ばされ、武蔵をいじり、俺が切り刻まれと時間はどんどん過ぎていった。

「もうそろそろだねー」

「そうやね、あと少しで終わる時間やね」

もうそんな時間か。運営から最後の日に終了直前にこのゲーム内で特大のニュース発表があると予告されていたが、まだそのニュースが発表されていない筈だよな。

「運営はニュースを発表すると言っていたが、まだで発表されておらんよな？」

「まだで御座る」

「最後まで居るつもりだけど、そのニュースは気になるよな」

まあ、後十分だその内来るだろと思っていると、不意に雪姐さんが

机に乗せていた顔を上げた。

「どうした雪姐さん？」

「リーダー、嫌な予感がする」

……雪姐さんの嫌な予感って当たるんだよねー。このタイミングで言わないで欲しいんだけど、だって俺も嫌な予感がビンビンしてる。

「つかぬ事を聞くが今回は誰に来そうなんだ」

「リーダー」

だよねー。その思考を最後に俺は皆の居る広場から消え失せた。

俺が呼び出されたのは白と黒で統一された部屋つまり。

「死ね！運営！」

「行き成り何をするか！」

ちっ！外したか。

「仮にも会社の上司に攻撃を仕掛けてくる出ないわ、服が破けたら責任取って襲ってもらうぞ！」

「安心しろ、殺る時は服なんて残らないくらいに殺ってやる」

「服も残らないくらいにヤルなんて相変わらず激しいんじゃないぞ。：

…だが嫌いじゃないぞ」

「そっちのヤルじゃねーよ。折角最後をあいっ等と楽しく喋りながら終わってもいいかな、と思い始めていたのに何で今更呼び出しやがった」

「なに、ワシの計画の準備がようやく整ったのじゃ」

フンと豊かな胸を強調するように胸をはる目の前にいる異国の雰囲気を持つ妙齡の美女。この若い女こそVR技術に革命を起こしたといわれる天才。【セレネ・ワールド】の主にして管理者である運営様だ。俺の勤めている会社の社長でもある。

「で、計画ってなんですか運営様」

「運営様など他人行儀に言うでない、昔みたいにおねーちゃんでもお姉さんでもリリイとでも何でも好きなように呼ぶが良い。昔はあ

んなに激しく求めえてきたくせに」

「黙れえ！まだ小学生だった俺に媚薬を盛ったのはお前だ！この変態運営が！」

「ふふ、あの時の満君は可愛かったなあ、そして顔に似合わない凶悪な攻めがまた良かった」

「いいから早く本題に入れ！」

まったく、自分でもトラウマになって居ないのが不思議なくらいだ。

信じていた人に襲われるとか女性恐怖症位になってもおかしくはない出来事だぞ。

「まあ本題に入る前に言っておこうかの。聞いて驚くでないぞ。実はワシは異世界の魔女なのじゃ」

……………はあ。

「む、その顔は信じておらんな。まあその内嫌でも理解するであろう」

「いや、むしろばれてないとも思っていたんすか？」

思わず語尾が崩れるほどの衝撃だ。

「何！？ばれておったのか！？」

「まあ綺麗過ぎる人だとは最初から思っていたんすけど。寝ぼけてる時に触れずに資料を動かしていたり、寝言で結構色々喋っていたすよ」

具体的には例の襲われた時の次の日にはもうぼろが出ていた。

「まさか言いふらしてたりはせんよな」

「してませんよ。言ってもこっちが病院に連れてかれます」

きつと可哀相な目で見られた後気遣われつつ連れて行かれるだろう。

「ならいいんじゃない。ではワシの計画の最終目標を伝えよう。………世界征服じゃー！」

.....

「なんじゃ！その可哀相なものを見る目は！興奮してしまうではないか！」

「黙れ」

「満よ。さてはこの世界を征服するのではないかと考えておるな。安心せい、征服するのはワシのいた世界じゃ。諸事情でワシはこの世界に来た訳なのじゃが、今日ようやく帰る用意ができたのじゃ。しかしワシだけでは世界征服は難しいよってお前を連れて行くことにした」

そっちではなくてだな。

「世界征服ってお前は子供か！後人の都合は無視か！」

「言いではないか世界征服！夢は大きく持つべきものだと言っじやる。それに契約書に書いてある通り定年までずっとワシの部下である事が決まっておるからの」

「小学生の時の契約書が有効な訳あるか！」

「それでも満君は律儀に契約を守ってくれてるのであります」

「黙れ」

だからこの人は嫌なんだよ、俺の事をよく知っているから勝てる気がしない。

「で、どうやって向こうの世界に行くんだ」

「良くぞ聞いてくれた！『セレネ・ワールド』には魔法陣をいくつか組み込んであつての、プレイヤーのVRマシンに仕込まれた魔法陣同士を繋いで巨大な魔法陣を作成し、その力でワシの世界への道を作ることができるのじゃ」

「まあなんとなくは分かった。魔法陣とか昔ながらの伝承も馬鹿にはできないのな。後このためにニュースの予告していたのか？」

「いかにも。ワシから見たらこの世界は魔術に関してはいまいちだ
がの」

それにしてもここまで思い通りに行かないか我が人生は。定年までは働かせてもらおうとは思っていたが世界を渡る事になるうとは余生くらいはのんびり過ごしたいな。

「さてそろそろ時間だしの、渡るぞ」

「分かりましたよ社長様」

「あの時の様にリリイと呼んで構わんのだぞ」

「分かりましたリリイ様」

意地でも呼んで堪えるものか。初めて襲われた時は本気で恐怖していたんだぞ。

「むう、仕方ないの。時間であるし、いざ！」

運営様が床に拳を突き立てると其処から見た事のない紋様が刻まれた複雑な魔法陣が広がっていった。

「魔法って呪文とか必要じゃないのか？」

「この場合は魔法陣に書いてある言葉が重要なのじゃ」

でも起動させるのが拳ってやたら漢らしいな。【セレネ・ワールド】でもロボットとかドリルに力入れていたから漢のロマンに理解があるのは分かっていたが。

そうこうしている内に視界が白く染まってきた。たぶんこれが終われば渡れるんだろう。

「あ、まずい」

え？何が？

1話（後書き）

満君はリリイさんに喰われて（性的な意味で）いました。その後色々あつて社会人になつても縁は切れてない。襲われて不憫なのか綺麗なお姉さんと一緒でうらやましいのかよく分からないね。

男女逆転したら一気に冗談じゃすまなくなりそうな話でもある。

2話

「……ふう、何とか成功したの」

「待てコラ！最後のあ、まずい。は何だったんだ！正直に話せ！」

白い光にが晴れた後まず、俺の目に飛び込んできたのはバオバブの木も吃驚の太さを持つ樹齡何億年だよ！と突っ込みを入れたくなる程の巨大な木々の群れだった。まあそれは良い、問題は俺の体にある違和感だ。と言うより体の動かし方がさっきまでと変わらないことだ。これはまさか……

「さっきのあれはちょっと座標がずれたのと、バラバラになりそうだったのとは……まあいろいろじゃ。渡れたんだから結果オーライの万々歳じゃろ」

「俺の体がアバターそのままなのは結果オーライの万々歳なのかよ！」

目にかかる髪は白色。手を見てみれば褐色の肌。触れば分かる長い耳。取り出した手鏡で見ると白っぽく変わっている瞳。来ている服は黒を基調とした正当系暗殺者スタイル。

そう俺の体は「セレネ・ワールド」の俺のアバター、リキッドになっってしまったているのだ。しかも呪い憑きもしっかり憑いて来ているらしく、俺の気分を表すように背中から伸びたスライムがorzの文字を作ってくれている。

「む、それは予定通りじゃ。元の体には魔力がないからの。ワシでは魔力がない肉体に世界を越えさせることはできん。かといって全く新しい体は嫌じゃろ？だからその体じゃ」

「それを先に言ってくれよ！」

言ってくれていたら契約を破つてでも逃走を図っていたかもしれない。幸い、このアバターは元の体をデータとして取り込んで、それに手を加えた奴だから元の体との違いはそこまでないが。

「むう、ミチルはその体を気に入っておったと思っていたのに不満じゃったのか？」

「ゲーム内でのアレは一応ロールだったんだよ！誰があそこまで深渊に浸っていそうなキャラを好んで使うか！……まあ、長い付き合いだからそれなりに愛着は湧いていたけど」

「……ミチル。お主はもうワシのような性格の奴とは係わり合いを持つてないぞ」

リリイが優しい目でこちらを見ながらそう言ってきた。

……何か言い返したいけど何も言えなかった。

「まあ、それはさて置き。致命的なミスがあるとすればワシは暫く魔法を使えんこと位かの」

「致命的過ぎませんかリリイ様！いかにもモンスターが出てきそうな場所じゃないですか！！」

世界征服の前に誰にも知られず。俺達はこの樹海のモンスターの餌になってしまうのか？

「安心せい。お主のその体は【セレネ・ワールド】のアバターそのものじゃ。何時もの様に動き、何時もと同じ性能がだせる。何のためにワシが【セレネ・ワールド】を構築したと思っておる。あの世界にはこの世界に渡るだけの魔法陣を世界に広げる為の魔法プログラムだけでなく、その世界のお主のアバターのデータをこの世界でのお主の体に代える魔法プログラムを仕込んであったのじゃ」

つまり今の俺の力はリキッドそのものって事か。でもそれだけではこの世界で強いのかどうか分らないか？あの【セレネ・ワールド】では最強クラスだったけど、この世界では井の中の蛙大海を知らずと言わんばかりにそこら辺にいるモンスターにあっさり殺されたりする事もあるんじゃないか？

「なにを不安そうな顔をしておる、参考程度に言っておくと。ワシが知っている限りの最強種は【セレネ・ワールド】で言えばレベル900台にいた地龍ガルギアースと言う奴じゃったかの。【セレネ・ワールド】の元ネタは何を隠そうこの世界じゃからの。ここいらにお主の敵になる奴はおるまいて」

地龍ガルギアースか。確かあのやたら硬くてでかくて強い奴だったよな、岩まみれの巨大な亀みたいな竜。900台にしてはなかなか強かったけど、最後は雪姐さんにジャイアントスイング決められてそのままフルボッコにされた奴か。

懐かしいなーと昔を思い起こしその惨劇に浸っていると、並び立つ巨木の向こう側から何かが現れた。しかもそれは1匹や2匹ではない30匹程もある群れだ。

「ふむ、噂をすれば影と言う奴じゃの。恐らくはワシらが渡ってきた魔法を感知したんじゃないやろうな」

現れたのは【セレネ・ワールド】では冒険初心者を試練と呼ばれたゴヌリンさん達でした。ゴプリンじゃなくてゴヌリンさん。正式名称はゴヌリンなのだが初心者にこの世界の厳しさを教えてくれるので、上位プレイヤーには敬意を込めてさんを付けて呼ばれているモンスターだ。

「ゴヌリンさんなら戦わずに済みそうかな。意外と温厚だし」

「……いや。そうもいかんようじゃの。見るがいい奴らの後ろを」
「いや後ろにいるのもゴヌリンさんじゃないの？ちよつと大きいけど」

「アレは恐らくハーフゴヌリンじゃな。つまりあの群れはゴヌリン盗賊団じゃ」

温厚な設定のゴヌリンさんだが雄しか居ないため、繁殖期に突入すると人型の生き物を巣に浚う事がある。その中で人間との間に産まれる子供の内、強力な固体はハーフゴヌリンと呼ばれ凶暴性が高い。それに率えられる群れもゴヌリンさんには珍しく凶暴になるのだ。

「つまり、問答無用で襲ってくる敵だから倒さなきゃいけないって事だな」

「そうなるの。もしお主が逃げ出したりしたら可哀相なワシは奴らの慰み者になってしまうじゃろうな」

なるほどな。ならゴヌリンさん達には悪いけど倒させて貰おうかな。

さて、この身がリキッドであるなら今までと同じように油断なく確実に殺させてもらう。

「ではリリイ様行つて来ます」
「行つてらっしゃい」

100mは離れていた所で此方を伺っていたゴヌリン盗賊団。その懷に音も立てずに一瞬で接近、彼らの内10匹の首目掛けて右腕を振るい、その後トンツとバックテップでリリイとゴヌリン盗賊団の中間地点に戻る。その時点でようやく彼らの首を失った胴体から噴水のように大量の真っ赤な鮮血が迸る。

「ギ？ギアアアア！！！」

生き残ったゴヌリン達が驚きの声を上げる。彼らからしてみれば俺がいつの間にか近くなっていると思っただけ仲間達の首がポーンと飛んでいたのだ。まあ驚くだろう。

ゴヌリン盗賊団達は血が目に入って前が見えなくなっているのか混乱している。そんな混乱している所にポケットから飛礫を取り出し思いつきで指で弾き飛ばす。命中したら5匹は力を込めすぎた所為で頭が弾けて赤の液体と白の破片を撒き散らした。力加減間違えた、反省。

仲間の大半を失った彼らはようやく俺に向かってこようとしたが遅い。俺は何時ものように敵に指を向け。

「シャドウカッター」

影系統の基本攻撃呪文を発動した。俺の足元から影の刃が生まれると影の刃はゴヌリン盗賊団の生き残り達に突き進み、触れたゴヌリン達の体を切り刻んでバラバラの肉片へと変えた。切り刻まれたゴヌリン達から溢れた血が大地を真っ赤に染めていく。

「ふうー」

……リリイの言ってる事は本当みたいだ。この体は「セレネ・ワールド」と全く同じだ。同じ速さ、同じ筋力、同じ魔法の使い方、同じ感覚。戦闘は問題無く行える。

「よくできたのー。こういうのはお主にはきついと思ったんじゃないが」
「……リリイ様。小さい頃からこういう事に慣らしてくれやがったのは何処のどいつでしたっけ」

「むう、それを言われると困るんじゃないが。しかし実戦はまた違うと言っじゃろ」

VRで色々な実験につき合わされていたんだ、これくらいなんて

事は無い。……軍用ロボの試験運転の時は酷かったな。アレに比べればましだよーアハハハ。ロボットに痛覚もたせてみました。ナニソレ。

「おーい、戻ってこーい。……駄目じゃな。ていつ」

「アハハハッ痛い!? ハッ俺は一体何をしていたんだ」

「うむ、治ったな。ゴヌリン達を倒してワシとこれからお楽しみタイムに入る所だったのじゃ」

「そうかゴヌリンを倒した所だったか。まあ何ができるか確かめられて良い戦いだったな。アイテムの取り出し方も今までと変わらないう事が分かったし。流石にアイテムが手に入ったりはないみたいだけど」

アイテムに関しては手鏡を自然に取り出せた時点で気付くべきだったがな。【セレネ・ワールド】がやたらリアルだったのはこの為だろうか。アイテム欄は有るけどポケットからしか取り出せないとか。

「そうじゃろそうじゃろ。【セレネ・ワールド】はお主の練習場にして特訓場でもあったのじゃからの。お主が運悪くおふざけで入れた二重の呪い憑きになった時は計画を修正せねばならぬと思ったが、お主は頑張って見事カンストするまで育ててくれたからの、結果的には万々歳じゃ」

「……え? リリイ様が仕込んだんじゃなかったんですか?」

「何を言うか、仕込んでなんかおらん。二重の呪い憑きを引き当てたのは間違いなくお主の運じゃ」

「……本当に本当ですか?」

「本当に本当じゃ。なんならワシの翡翠の瞳にかけてもよい」

リリイがここまで言うって事は本当なんだろう。今の今まで仕込

まれていたと思っていたんだが違ったのか……。ちよつと、いやかなりシヨックだな。自分の運の悪さとリリイを疑った事に。

「……あー、ワシの事なら気にするでないぞ。ワシでも自分のやってきた事は自覚しておるし。……だからそんなしょぼくれた可哀相な表情を見せるでない。居た堪れない気持ちになるではないか」
「大丈夫です、リリイ様。後五時間ぐらいしたら完全復帰します。それまで放って置いて下さい」

顔を隠さなきゃな見た人が居た堪れなくなるらしいから。確か所持品の中に仮面があつたはずだからそれでも付けておこう。ポツケを探つて。……あつたあつた道化師の仮面。カポツとな。これでOKだな。

「……ましにはなつたんじゃが。何故その仮面をチョイスしたんじや？ワシへの当て付けか？」

「いえ、勝手に仕込まれたと思って自分の気持ちを表してみました」

「……そうか。とりあえずこれからの行動計画を伝えようかの。暫くはこの森に拠点を作りつつ周囲の状況を探る事にする。これでいいな」

「御意」

「キャラ付けはせんでよい」

あんたが言うな。いや、もしかしてそれが素なのか！？そうなのか？

2話（後書き）

次回ミチル君のアバターのデータが明らかに。

作者後書き

突込みが来る前に書いておきます。満君はVR関係のある才能があり、それが原因で運営と関わったりしました。その為操作方法が非常に感覚的でそれが当たり前のことと本人は思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322x/>

すらい魔の世界を巡る旅

2011年11月12日18時42分発行